地球と社会のための“人づくり”応援マガジン

ESDレポート vol.28

2012年春　2012年3月26日発行

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育 =Education for Sustainable Development」の略。環境・貧困・人権・平和など、私たちが直面するさまざまな問題に取り組み、豊かで公正な未来を創造するための「価値観」と「スキル」を育む、未来創造型の学びです。「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が2005年からスタートし、世界各国で取り組まれています。

特集

震災からの再生 × ESD vol.2

校舎前で元気にジャンプをする6年生（宮城県気仙沼市立大谷小学校）

ESD-Jは昨年6月に仙台で開催したESD-J全国ミーティングで、被災地での被害や復興に向けた動き、課題についてのお話をうかがい、「ESD関係者にできること」について議論しました。そして、被災地のことをもっと知ること、つながること、その経験から学ぶこと、自分の地域でできることを考え、行動すること、そんな学びの場を広げていくことが大切だと話し、それぞれが自分の地域でできることを始める、ということを確認しました。

震災から1年。被災地での取組みや、全国各地の震災をテーマとした学びの場づくりに取り組む人たちを紹介することで、今、改めて私たちに何ができるのかを考えたいと思います。

目次

特集　震災からの再生× ESD　vol.2

被災地からの報告1　子どもの笑顔あふれる学校と地域学習の実践をめざして 2
「3.11あの時　東日本大震災3月11日14時46分からの物語」 3
被災地からの報告2　福島からの提言 4
東日本大震災からはじまる被災地外での学び 5
『未来をつくるBOOK』で、震災から学ぶESDを 5
会員リレーコラム　ジャパン・フォー・サスティナビリティ、松本浩一さん、関口宏聡さん 6
ESD-Jの活動紹介　わたしたちにとってのESDらしさ 7
トピックス　リオ＋20に向けたESD関係者からの提言 8

Japan Council on the UN Decade of Education for Sustainable Development
ESD-J
「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

被災地からの報告 その1

子どもの笑顔あふれる学校と地域学習の実践をめざして

藤村 俊美（宮城県気仙沼市立大谷（おおや）小学校長）

◆ふゆみずたんぼの復旧

3月11日午後2時46分、宮城県沖を震源とするM9.0、震度6弱の大地震が発生し、校庭から400mほどしか離れていない大谷海岸から、高台にある学校めがけて津波が押し寄せ、多くの建造物を破壊しました。

また、大谷海岸駅方面から襲来した津波は校舎北側の水田を呑み込み、校庭西側にある滝根川からも津波が浸入し、小中学校共用の広い校庭全面が瓦礫の山となったのです。

本校では地域学習の一環として、また環境教育の一つとして、総合的な学習の時間で「ふゆみずたんぼ」の活動に取り組んできました。これは、大谷小中学校地域コーディネーターの小野寺雅之さんが大谷中学校で行っている「ハチドリ計画※」に、小学校や幼稚園が参加したものです。

主に5年生の子どもたちが、種モミの植つけ作業、人間しろかき、田植え、除草、稲刈り、脱穀等の作業や生き物調査を中学生と一緒に行い、全校児童や幼稚園が田植えや稲刈りに関わる活動を行っています。

↑　被災翌日（3月12日）の校庭

冬場の田んぼに水を入れておき、無農薬、有機肥料で行なう農業は、微生物をはじめとして冬場の生き物のオアシスを創出します。また、ここで収穫する稲から「大谷っ子米」（ササニシキ、ヒトメボレ）を精米・販売することで、キャリア教育にまで指導を広げることができるのです。さらには、生物多様性と人とのつながりや、地域を大切にする心を育てることにも大きく貢献できると考えます。

このふゆみずたんぼの畦を道草しながら虫をつかまえたり草花を見たりすることが子どもたちは大好きで、5年生になって「田んぼの活動」ができるのを心待ちにしている子もいます。その田んぼも、津波で流されてきた自動車など、瓦礫だらけになりました。「もう田んぼの活動はできないと思いとても悲しい気持ちになりました」と作文に書いた子もいました。

地域コーディネーター小野寺さんの呼びかけで、“ふゆみずたんぼ復旧プロジェクト”が開始されたのは4月の末でした。全国から延べ100名近いボランティアの方たちが、田んぼの復旧を目指して、瓦礫の撤去等をすべて手作業で行いました。田んぼの中に入ったガラスや石や貝殻などの異物を除去し畦をつくり直し水路を確保し、何とか田植えができるまでに復旧することができたのです。

10月には、念願の稲刈りを行うことができました。例年にない豊作でした。「何か災害があったときは豊かな実りがある」、そんな言い伝えも残っているそうです。

「ふゆみずたんぼのお米でたいたご飯を食べたときは、涙が出るほどうれしかったです」。子どもたちの声です。また、震災直後は瓦礫だらけになって何も生き物がいなくなってしまいましたが、元にもどったふゆみずたんぼに、子どもたちが大好きな虫や鳥たちが帰ってきてくれました（この原稿を書いているちょうど今、白鳥まで飛来しています）。「ここまで復旧できるとは思わなかった」、子どもたちの素直な感想だと思います。本当にこのふゆみずたんぼの復旧は、地域の復興のまさにシンボルになりました。

ふゆみずたんぼの再生を目指して，全国から集まったボランティアによる瓦礫の撤去作業　→

◆環境教育全国大会の開催

11月25日、「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進～子どもと地域の未来を拓くESD～」をテーマに、全国小中学校環境教育研究大会・宮城大会が大谷小中学校を会場に開催されました。小中合同授業を含め、8つの授業を提供し、研究発表や「震災を乗り越えるための未来に向けたESD」をテーマに、シンポジウムも行われました。

そのようななか、5年生が防災をテーマにした総合的な学習の時間「防災リーフレットをつくろう」の授業を公開しました。子どもたちは防災を自分のこととしてしっかり受け止め、真剣に取り組んでいました。まさに防災教育は、地域の環境を考えるうえでの究極の学習であるとの思いを強くしました。

◆地域学習の推進

もともと本校では、大谷の海、川、山、農地などの豊かな自然や、公民館、福祉センターなど、地域をテーマとした地域学

※ハチドリ計画：「私たちにできること」として、南米に伝わる「森の火事に嘴で水を運ぶハチドリの物語」から命名。

習を行ってきました。しかし震災以来、海や川に関連したものから学習内容を大きく変更せざるを得ませんでした。

今年度から地域防災をテーマに 5 年生が学習を始めましたが、ESD を推進していくためにも防災教育は欠かせないテーマだと思うのです。エネルギーやゴミ問題だけが環境教育ではなく、地域防災を含めた地域の環境そのものを学際的に学習していくことこそ、ESD のねらいに合致したものであろうと考えます。

3.11 の地震が発生した午後 2 時 46 分は、帰宅した児童、下校途中の児童、学校で授業中の児童とまったくばらばらでした。このような条件下では今まで一度も避難訓練をしたことはありませんでした。まさに、小学生であっても自分の身は自分で守らなくてはならないのです。

だからこそ、学校での防災教育が大切なのだと思います。そして今こそ、学校・家庭・地域が連携し、一体となって防災教育に取り組んでいくことが求められているのです。

藤村 俊美 (ふじむら としみ)

1954 年北海道生まれ，宮城教育大学を卒業後，気仙沼小学校を初任地として，太白小学校，面瀬小学校，開北小学校，九条小学校を経て，気仙沼市教育委員会から現在の大谷小学校に至る。大谷小に赴任してユネスコスクールの認定を受け，大谷中学校が行っている「ハチドリ計画」の仲間入りをし，環境や防災，福祉などの地域学習を実践している。

津波被害から甦った農作のふゆみずたんぼで 5 年生たちが嬉しい稲刈り

やはりボランティアの協力のもと、花壇再生プログラムできれいに咲いた花

EPO 東北 web サイト

「3.11 あの時　東日本大震災 3 月 11 日 14 時 46 分からの物語」

井上 郡康（EPO 東北統括　NPO 法人 気候ネットワーク理事）

東日本大震災は、東北地方を中心に甚大な被害をもたらし、直接津波に遭わなかった地域でもライフラインが止まり食料不足などにも苦しんだ。

EPO 東北では、被災地を訪れて話を聞く中で、「あの日のことを話したい」という被災者の思いを強く感じ、震災の記録として「3.11 あの時－東日本大震災 3 月 11 日 14 時 46 分からの物語－」をスタートさせることになった。それぞれの被災の状況や復旧復興活動、そして今何を感じているかなどを正確にリポートしている。

取材をした多くの人たちが「今の便利な社会を見直す機会だ」と語っている。普段当たり前のように電気を使い、蛇口をひねれば水が出る生活は当たり前ではなかった。一方で昔ながらの生活をしている家では影響はさほどなかった。薪のお風呂など元々地域にあるものを使っている家ではエネルギーの供給が分散しているのでリスクが少ないということである。

歴史的にも東北地方沿岸部には何度も津波が襲っており、先人たちは、石碑や神社や様々な形で現在の我々に警鐘を与えている。インターネットやテレビなどない時代に、智恵を絞り後世に伝えようという意思が伝わってくる。それはまさに、持続的に人間が地域で生活していくための ESD と言えるのではないだろうか。我々もこの時代を生きた人間の責務として、後世に何かを残す努力をしていくべきだと考える。

町には電気が消え、夜空に満点の星を見たときに我々は何を感じていたのか？　それを絶対に忘れてはならない。

井上 郡康（いのうえ くにやす）

宮城県内小中学校への地球温暖化をテーマにした環境学習を展開。2008 年 4 月から FM 仙台の番組「PUMP UP FRIDAY」に 2 年間レギュラー出演。2010 年 4 月からは、東北環境パートナーシップオフィスの統括として勤務。

http://www.epo-tohoku.jp/3.11/index.html

被災地からの報告 その２

福島からの提言

橋口 直幸（NPO 法人こどもの森ネットワーク理事長）

ここは福島県猪苗代町。磐梯山のふもとは雪におおわれ、郡山市から来てくれた保育園の子どもたちは、数か月ぶりの本格的な外遊びで大はしゃぎです。

私は現在、放射能の影響で外遊びできていない地域（主に中通り地区）の子どもたちのために、バスを借り上げて放射線量の低い猪苗代町まで送迎し、１日思いっきり外遊びさせてあげる事業を、福島県やスキー場、社会教育施設などと協議体をつくって行っています。

昨年３月 11 日から１年近く経過しているにもかかわらず、福島市や郡山市など子どもが数万人暮らしている地域ではいまだに空間線量が 0.3 ～ 0.8 マイクロシーベルト / 毎時程度あり、小さな子どものいる保育園や幼稚園では、今でも屋外活動が厳しく制限されています。

この状態は、だんじて「持続可能な社会」とはいえません。

私は平成 17 年度から、子どもの健全育成のために、森など自然のなかでの活動を大切にした「森のようちえん」の福島県での普及に取り組んできました。

そこで起こった、あの震災。幸い、ここ猪苗代町をはじめとする会津地方は、福島県内では地震の影響も少なく、放射線の数値も低いため、住民は見かけ上は震災前と変らない生活を送っています。

現在の活動に至ったきっかけは、震災直後の１次避難所になった猪苗代町の総合体育館でのこと。主に南相馬市などの浜通り地区から避難してきた人たちが、一時 500 人ほど避難生活を送った体育館です。ここでは子どもの居場所がなかったため、私が理事長をつとめる NPO 法人（こどもの森ネットワーク）で、子どもの遊び場の設置を提案し、約１か月運営しました。

４月に入って、子どもたちは２次避難所へと移っていき役目は終えましたが、その後、私の頭には「これから長い間、放射能の影響で外遊びできないであろう多くの子どもたちの姿」がはっきりと残りました。

それから頭の整理に少し時間がかかりましたが、見えてしまった課題から目をそらすことはできず、「外遊びできていない子どもたちのために自分のできることを続けていく」ことがこれからの使命と決心しました。

このような事態を起こした直接の原因は福島第一原発の事故ですが、この１年近くの経過から学ぶべき「これからの福島、日本、世界の持続可能な社会づくり」に向けての教訓は、放射能問題だけにとどまりません。

放射線量の高い地域の広域での面的除染を最優先で進める必要がありますが、取り除いた表土などの中間貯蔵場所の確保など、解決しなければならない問題が山積しています。

保育園や幼稚園では、時間制限を設けて外で遊ばせてほしい親と、いっさい外には出さないでほしいという親の意思統一が未解決で、地域に暮らす大人の放射能に対する理解とメンタルのケアも大きな課題です。

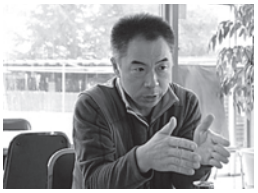
もっとも深刻なのは、子どもの外遊びできていないことによる健康被害、ストレスなどのケアです。子どもの外遊びだけに絞っても、われわれ大人、地域、社会がやらなければならないことはいくらでもあります。

私の提言は、子どもの遊ぶ権利（イコール生きる権利）の視点から、子どもが安心して暮らせる社会をどう築いてくかというシンプルで根元的な思考です。

環境という大きなつながりで、年々世界と地球は小さくなっています。

これは、決して福島だけの問題ではありません。この事実を一人ひとりが「他人ごと」ではなく「自分ごと」として共感することから、震災後の「持続可能な社会づくり」に向けての新たな一歩が始まると信じています。

左頁写真：子どもは雪遊びが大好き。でも外遊びは数ヶ月ぶりという現実が背景に
左下写真：活動に関われば、子どもにとって外遊びがいかに不可欠かは明白
右下写真：外遊びを通して親子のきづなが深まる一面も



橋口 直幸
（はしぐち なおゆき）

福島の子どもの外遊び支援ネットワーク代表 /NPO 法人こどもの森ネットワーク理事長
18 年前に千葉市から猪苗代町に I ターン移住。自然学校「森の楽校フォレストランド」を主宰し、磐梯高原を舞台にした環境教育に取り組む。現在は、放射能の影響で外遊びできていない福島の子どもたちのための「外遊び支援」に全力投球中。

●被災地から遠く離れた場所で、震災をテーマに学ぶ

東日本大震災からはじまる 被災地外での学び

特定非営利活動法人開発教育協会（DEAR） 八木 亜紀子

「震災からはじまる学び」 http://www.dear.or.jp/shinsai/

DEAR では、昨年 6 月、授業実践やリソースを紹介するサイト「東日本大震災からはじまる学び」を開設。全国の教員から寄せられた、震災をモチーフにした教育実践を掲載しています。実践の多くは、被災地以外の地域での取組みです。エネルギー、防災、まちづくり、市民参加、メディアリテラシーなど、これからの社会のあり方＝日本のこれからの「持続可能な開発」を問う重要な視点が多く含まれ、被災の有無を問わずに「学ぶ」ことの意義を読み取ることができます。

この 2 月には、教材『もっと話そう!原発とエネルギーのこと』*を DEAR 会員限定（非売品）で発行しました。特に原子力については「適当な教材や情報を得るのが困難」という教育現場の声が多く届いており、そのニーズに応えるべく作成したものです。核廃棄物から、原発停止を巡る賛否、原発輸出のことなども盛り込みつつ、まずは「もっと話す」ための場をつくる 12 の参加型学習を提案しています。利用者の声を聞きながら、この夏には一般販売できる教材としての発行を予定しています。

＊ http://www.dear.or.jp/book/book01_energy.html

八木 亜紀子（やぎ あきこ）

大学時代に国際ワークキャンプに参加したことをきっかけに、国際協力の世界へ。複数の NGO 等を経て、2007 年より DEAR に非常勤職員として入職。広報、研修・ワークショップ、教材作成を担当。

『未来をつくるBOOK』で、震災から学ぶESDを

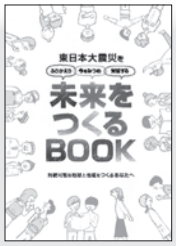
ESD-J は 11 月、『東日本大震災をふりかえり、今を見つめ、対話する・未来をつくる BOOK ～持続可能な地球と地域をつくるあなたへ～』を発行しました。

震災を機に見えてきた社会のほころびや、本当に大切なことについて、さまざまな場所で対話を生み出すこと、被災地のことを忘れず復興への思いを持ち続けること、そしてどのような未来をつくりたいのかを問い続けることが大切であり、そのような場をつくっていくことが ESD の役割だと考えたからです。

12 月から学校でのワークショップ支援プログラムを実施しており、1 校 40 冊を贈呈。現在、小・中・高等学校、約 20 校が、震災からの学びの場づくりに取り組んでいます。中学校では、教員が東北ボランティアに参加した経験を子どもたちに語る時間と組み合わせて「第 6 の扉　支援・ボランティア」を使用したり、小学校では、社会の時間と防災教育を組み合わせて「第 2 の扉　買い物」を使用したり。

現在、新学期からの授業に生かしてくださる学校を、さらに募集中です。詳しくは、ESD-J ウェブサイトをご覧ください。

企画・制作：
ESD-J「未来をつくる BOOK」制作チーム
A4 判 56 頁
700 円（税込）
みくに出版刊



19 情報を介して人をつなぐ場づくりを

ジャパン・フォー・サステナビリティ（JFS）　小島 和子（団体正会員）

世界と日本を持続可能な方向へ推し進めるため、JFS は、環境や持続可能性に関する日本の先進的な取組みを世界 191 カ国・地域に発信しています。

東日本大震災に際しては、被災地の安否を気遣うメッセージや原発情報を求める声が、海外からも数多く寄せられました。間もなく設立 10 周年を迎えますが、日本と海外をつなぐチャネルとして、果たすべき役割がまだまだあることを実感しています。

若い層に向けた ESD 的な学びの場としては、世界の子どもたちをつなぐコミュニティサイト「未来クル・MIRACLE―こども未来創造プロジェクト」を昨年 9 月にオープンしました。地球環境や社会のことを自分たちで考えて、人に伝え、学び合い、行動するきっかけをつかんでほしいという願いから、言葉の壁を超えた子どもたちの交流・学び合いを応援しています。

今後もさまざまなステークホルダーを対象に、情報を介して世界と日本の人をつなぎ、持続可能な社会に向けた学びの場をつくっていければと考えています。ぜひ、ESD のネットワークの皆さんもご一緒ください！

←バイリンガル構成で世界の子どもが交流できる「未来クル・MIRACLE」

20 東日本大震災で問われるESDの真価

埼玉県立小川高等学校　定時制教諭　松本 浩一（個人正会員）

2011 年 4 月、地元で東松山震災ボランティアの会を立ち上げた。今年 2 月末までに 37 便のボランティアバスを運行。800 名近い市民が被災地を訪れ、瓦礫撤去作業や被災者との交流などを行い、個人で参加する多くの高校生とともに被災地で汗と涙を流した。ボラバスと同時に東松山で避難生活を送る福島や宮城の方たちの支援も開始。商店街と連携して、風評被害に苦しむ東北の農家や復興を目指す漁師たちの物産販売を行うマルシェも始まった。当初から長期にわたる地域連携を念頭に置いた活動は、地元自治体・事業者にも波及し、名前の似ている埼玉県東松山市と宮城県東松島市が災害時相互応援協定を締結することとなった。

活動の主眼は、次の災害に対応できる「人材の育成」と新しい社会を構築するための「しくみづくり」だ。被災地と被災地を支える他地域は、それぞれ「持続可能な社会」をつくるための貴重なフィールドだと思う。教育に携わる者としてこの「機会」を逃したら 2 万人の犠牲者に申し訳ないと痛感している。

東松山震災ボランティアの会（チーム東松山）http://thm.hiki.tv/　mail: team_hm@hiki.tv

←被災者とともに行った災害ボランティア

21 市民の寄付が、日本社会を変える

特定非営利活動法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会
プログラム・ディレクター　関口 宏聡（個人準会員）

シーズ・市民活動を支える制度をつくる会は、NPO 法人制度や認定 NPO 法人制度などを、各地の NPO/NGO や国会議員とともにつくってきた団体です。昨年は、超党派の NPO 議員連盟のご尽力で、新寄付税制（寄付金の最大 50％が減税になるという寄付金税額控除 / 新 PST*「3 千円の寄付者× 100 人」など）と、NPO 法改正（認定機関の地方移管 /「仮認定制度」導入など）が実現できました。制度創設以来の抜本改革で、世界的にも遜色のない寄付税制が整いました。

寄付金税額控除には、自分の税金の使い道を指定できるという意味もあります。市民が、目指す社会像を共有できる認定 NPO に寄付することで、税を含めた公共資金の流れを変えられるのです。

日本では東日本大震災を受けて、約 8 割の国民が寄付を行い、300 億円近い活動支援金が NPO/NGO に託されました。今、大きな寄付のうねりが生まれつつあります。＜市民により支えられる NPO ＞を目指し、ぜひ、新しい認定 NPO 法人制度を活用してください。

＊ PST（パブリック・サポート・テスト）：法人が広く一般から支持されているか数値により計測する指標

←新寄付税制法案成立記念 @ 参議院前

わたしたちにとってのESDらしさ

＋ ESD プロジェクト全国学びあいフォーラム 2011

2011 年 10 月 16 日（日）、全国から ESD につながる活動の実践者や推進者が東京の「JICA 地球ひろば」に集まり、“＋ ESD プロジェクト全国学びあいフォーラム 2011” が開催されました。今回のフォーラムは、「ESD らしさ」「ESD 的」とはどういうことなのかを、集まった全員で改めて確認しあい共有する時間となりました。皆さん、自分たちの活動のどんなところに「ESD らしさ」を見いだしているのでしょうか。

＊自分の意見を持たせる・持つ

子どもたちが実際の行動や活動ができるようになるには**自分の意見を持つ**ことが大切です。そのための指導を行なうのが ESD らしさです。震災・復興基本計画では、「海と生きること」をテーマにしています。私たちは自然との付き合い方を海から学び、それが文化となっている。そうしたことを受けとめながら畏敬の念を持って海と生きていきたい。これも ESD の一つだと思います。　（気仙沼市教育委員会　教育長　白幡勝美さん）

＊地域を再生していく気持ちをつなげる

公害学習を地域の歴史として学んでいくことを軸に環境教育を行っています。自分ごととしてどう受け止めるかという視点から、地域の人に語り部として学校に来ていただき、公害病のことや裁判のことをうかがい、思いをつなげています。大事なのは、**地域を再生していけるような気持ちをつなげていく**こと、これが ESD らしさです。

（大阪府立西淀川高等学校　辻幸二郎先生）

＊自然と文化、生き物のつながり

全国に点在するフィールドに環境教育スタッフを派遣し、地域調査などのソフト提供やエコツアーを実施しています。私たちの NPO は“いきもの屋さん”です。自然と人との関わりについて体験を通して伝えています。体験をして終わりではなく、参加者が「自分たちにできること」を共感できるよう工夫しています。**身近な生き物と文化はつながる**、それを伝えることが ESD らしさです。

（河川環境楽園・自然発見館　指導員　河野恵子さん）

＊価値観を変える

トヨタ自動車から助成金をいただき、南北問題をどう解決するかという活動を行っています。環境や社会や経済は対立・並立するものではなく、経済を内側にして、社会、そして環境が取り巻くという考えでないと持続可能な社会はできません。**価値観を変える**ということです。今、人間が生物として生きるためには地域の自然を徹底的に使いこなす必要がある、その視点が ESD らしいと思います。

（NPO 法人地域の未来・志援センター　副理事長　駒宮博男さん）

＊世代や文化を越えた交流

小学校の古い校舎を使った合宿型のプログラムや、地域の農家と農作業を行う活動をしています。子どもを連れて参加した父親のほうが最後は夢中になっていることも多々あります。また、親が子どもをみなくても地域の人たちがみてくれるというつながりができていきます。農山村という場所は都会から来た人たちにとって異文化。異なる考え方を持つ人たちが一緒にご飯を食べ、自分自身を見つめ直していきます。このような**世代や文化を越えた交流**が ESD らしさです。

（山村塾　事務局長　小森耕太さん）

＊交流と連携の広がり 活動の深まり

環境、子育て、食育等多様な活動を地域と行政が連携しあい進めています。普通の子育てサークルをしている人たちが ESD を知り、国際理解や環境教育を進めたりしています。**ESD という視点からそれぞれの活動が深まりを見せている**のが ESD らしさです。　（岡山市環境局　統括審議監　内藤元久さん）

これら ESD 実践者 6 人の報告を受け、コーディネーターの枚本育生さん（NPO 法人環境市民・代表理事）は、「持続可能な開発を推進していくためには、環境と社会と経済がうまく絡み合いながら、人とつながりあい継続していくことが必要だ」と第 1 部を総括しました。「人にどう関わっていくのか、教育がそこにどう関わっていくのか、今、私たちに問われています」。

※ 第 2 部では「学校」「地域」「ESD 支援」というテーマで分科会に分かれ、それぞれが抱えている課題や今後のことにまで話が及びました。詳しいことはホームページの【実施報告】をご覧ください。

http://www.p-esd.go.jp/design/forum/all.html

（報告まとめ：中川 哲雄）

トピックス リオ+20に向けたESD関係者からの提言

1992 年のリオサミットから 20 年を経た 2012 年の 6 月 20 日～ 22 日にかけて、ブラジルのリオデジャネイロでリオ＋ 20 会議が開催されます。この会議の目的は以下の通りです。

1. 持続可能な開発に関する新たな政治的コミットメントを確保する。
2. 持続可能な開発に関する主要なサミットの成果の実施の進展状況と残されたギャップを評価する。
3. 新たに生じつつある課題に取り組む。

この会議では①持続可能な開発および貧困根絶の文脈におけるグリーン経済、②持続可能な開発のための制度的枠組みの 2 つが主要テーマとなります。本年 1 月 10 日には成果文書のゼロドラフトが国連により公表されました。

我が国では、多くのステークホルダーが集まって「リオ＋ 20 国内準備委員会」を形成し、2 回のワークショップ、4 回の準備委員会での討議等を踏まえて「持続可能な開発の推進に向けた日本のステークホルダーからの提案（準備委員会提案）」を国連に提出しました。

準備委員会提案では、ESD について「国連持続可能な開発のための教育の 10 年 (ESD の 10 年) に基づく学校教育、社会教育、企業教育の推進を通じた人材育成、ESD の 10 年後に向けた具体的な行動計画の策定と実施を提言しています。国連のゼロドラフトでも「ESD の 10 年が終了する 2014 年以降も ESD を推進することに合意する」との提案がなされています。2014 年以降の ESD の継続強化に関する世界的合意ができつつあると言えるでしょう。

(ESD-J 理事･鈴木 克徳)

新メンバー紹介

8～2月

7 団体、18 名の方が新メンバーに加わりました。また、3 団体に賛助会員として参加いただきました。2014 年に向けて、一緒に取組みを広げていきたいと思います。

団体正会員	一般社団法人 あいあいネット、サス塾、ジャパン･フォー･サステナビリティ、ほっと村、仙台広域圏ESD･RCE運営委員会、NPO法人 フォーエヴァーグリーン
団体準会員	里山學校
個人会員	18名（北海道1名、関東10名、北陸1名、近畿1名、四国1名、九州3名、海外1名
賛助会員	公益財団法人 旭硝子財団、株式会社 損害保険ジャパン、株式会社 モンベル

編集後記

昨年 3 月 11 日の大震災から 1 年。自分に何ができるのかを問いながらも、足もとの仕事を形にすることに追われて、なにも動けず悶々としていた苦しい時間を思い出す。そして今も大して変わっていない状況に苦笑い。悩みながら進むしかない。東北に早く暖かい春が訪れることを祈りつつ。（ESD-J 事務局　村上 千里）

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

http：//www.esd-j.org/　　e-mail：admin@esd-j.org

〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-67　コスモス青山B2F

TEL：03-3797-7227　FAX：03-6277-7554

● 会員募集中：正会員（10,000 円）、準会員（3,000 円）詳しくは HP をご覧ください ●

発行：認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議　編集：ESD-J情報共有プロジェクトチーム　レイアウト：河村久美

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C004858

この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、フードマイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

ESD-J だより 8月～3月の活動

8月11日	「ESDの10年･世界の祭典」事業化ワークショップ 実施
8月23日	Rio＋20国内準備委員会 第2回会合 参加
8月25日	ESDレポート27号 発行
9月1日	Rio+20国内準備委員会･第1回ワークショップ 参加
9月3日	ESDフォーラム2011（名古屋）参加
9月14日	Rio＋20国内準備委員会 第3回会合 参加
9月17日	第4回理事懇談会 開催
9月17-18日	ESDの10年･地球市民会議2011（愛知）参加
9月29日	環境省 ＋ESDプロジェクト普及委員会総会 開催
10月2日	ESD学びあいフォーラム（松山）参加
10月2日	Rio+20国内準備委員会･第2回ワークショップ 参加
10月11日	Rio＋20国内準備委員会 第4回会合 参加
10月16日	＋ESDプロジェクト全国学びあいフォーラム2011 開催
11月6日	第5回理事懇談会 開催
11月12日	ユネスコスクール全国大会 参加
11月25日	『未来をつくるBOOK』発行
12月4日	ESD学びあいフォーラム（会津）参加
12月9日	ESD関係機関間情報交換会 参加
12月9-10日	統営ESD国際フォーラム 参加
12月10日	第2回理事会 開催
12月16-18日	エコプロダクツ展 出展
1月8-9日	第6回理事懇談会 開催
1月14日	第3回理事会、臨時総会 開催
1月21日	京都環境教育ミーティング 参加
1月23日	関東地域ESDコーディネーターあり方検討会 開催
1月28日	ESD東北学びあいフォーラム（青森）参加
1月30日	ESD-J理事選挙 公示
2月1日	Rio＋20国内準備委員会 第5回会合 参加
2月2日	北海道ESD学びあいフォーラム（札幌）参加
2月17日	+ESDプロジェクト検証検討委員会 開催
2月27日	ESD関東学びあいフォーラム（東京）開催
2月28日	＋ESDプロジェクト普及委員会幹事会 開催
3月10-11日	ESDアジアNGOネットワークに関するバンコクワークショップ 開催
3月12日	ESD-J理事選挙 開票
3月15日	NGO連携会合 参加
3月20日	第4回理事会 開催
	ESD×生物多様性プロジェクト編集会議 開催